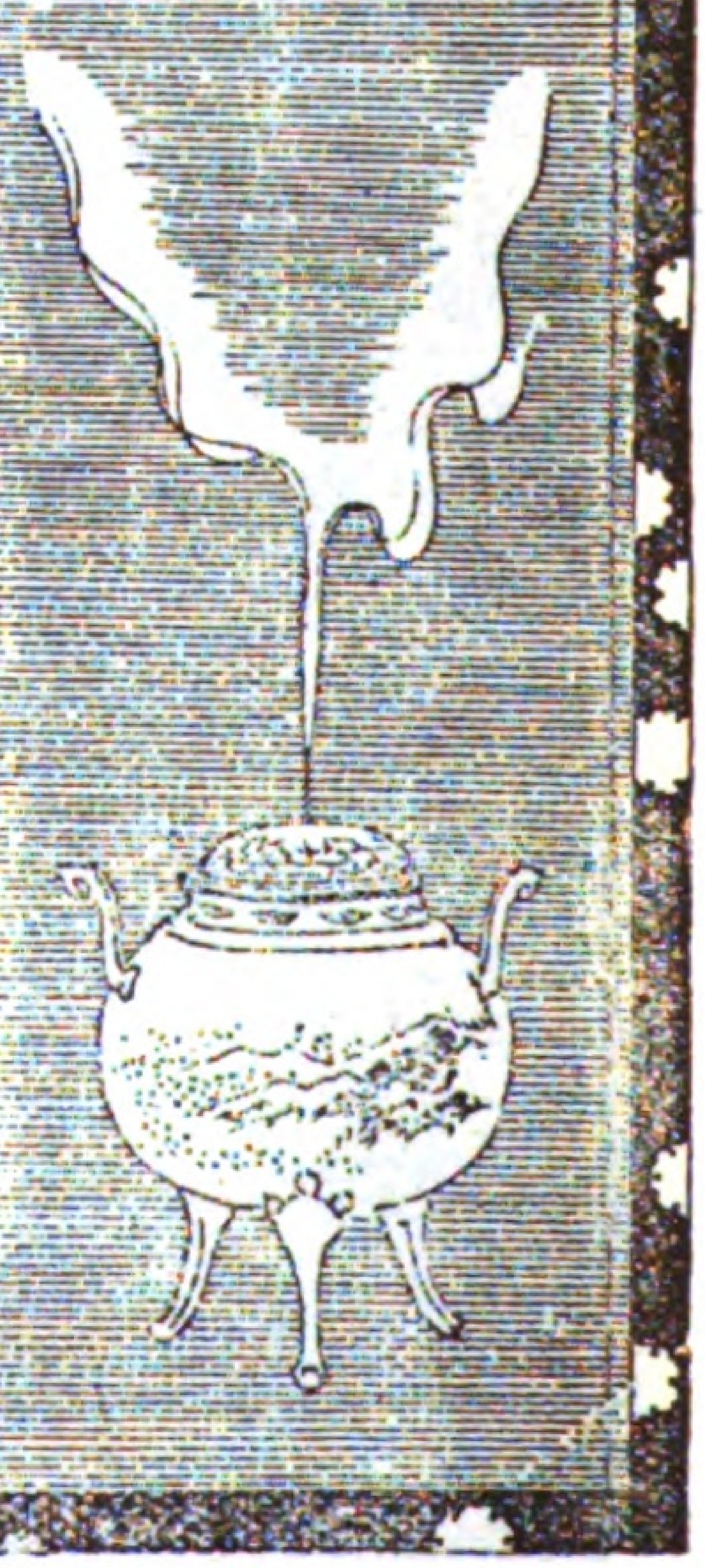
毎月四回發行

いらつめ



いらつめ第卅六號目次（明治二十二年十二月廿二日）

●家政……押し繪作り方（第三）……石原一枝孃
押し繪に金粉で筋を入れる仕方＝梅に式紙のカアド（圖入）＝梅に鶯のカアド＝芙蓉の羽子板（圖入）
○衞生料理法＝（第八）……岩間芳松
上等料理＝鷄のむしやき
●文藝美術……文と語調との關係（其一）……美妙齋主人
○五社百詠（二）……俊成卿
○懸賞唱歌「歲暮」
●雜纂……米澤鷹山侯女中示し書き（承前）＝色の取り合はせ方（承前）＝女生徒の肩掛け漫評（承前）＝普通語「です」と「ございます」と「であります」＝最良朱肉製法
●小說……歲の垣（其一方）……田中龍耀
●寄書……女生徒のために最も親切な下宿屋を開きたし（鷹野さやう子）
●答書……鹿皮の手袋を曹達で洗ッて硬くなつたのを柔にする法
●通信問答……けじに舐められると毛がぬけるとの諺＝藥を引いた鐵鍋＝珊瑚珠の根掛けの油拔き方＝醬油のカビを防ぐ法＝溫泉＝醫學と外國語＝癋風會＝シヤボンの後に硼砂＝束髮のくせ直し＝鉛筆畫手本＝水彩畫手本＝仰天子霞亭主人露伴子嵯峨のや氏笠園主人の本名＝硇砂と硼砂＝疑問
●餘興……新題及び解答

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二十九錢郵稅共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵稅共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵稅共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵稅共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六十五錢郵稅共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵稅共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府內に限り無郵稅●每月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば排浦郵便局とある處に（神田郵便局）と記し、受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證として雜誌の表紙に成美社の捺印を加へましたから是を目標として御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任じません。捺印の無いのを御求に爲ッても代金御支拂に及びません。

從第二十八號至第三十七號十部版權所有

新案別製本出版の社告　度々の御注文により第二十六號からいらつめ別製本を作り、永く保存よ堪へるやうにしました。（一）別製本は美麗堅牢な紙に本文を印刷する事（二）別製は容易に再版をせぬ故ゆゑ御注文は至急で無ければ賣れ切れになります（三）別製並製共記事は相同じです（四）定價は前にあります（五）第二十六號第二十七號及び第二十八號の別製本は悉皆賣れ切れになりました。

いらつめ合本の社告　西洋諸國の婦人雜誌では大抵一仙か一ペンニの月三回以上發兌でそれを一ヶ月の後になり、一ヶ月分だけ合本し、表紙を付けて賣り出します。いらつめでも是に倣ひ、來る十二月が過ぐれば更に十二月分だけを合本し、美麗な表紙を付けて賣り出します。定價金十錢五厘郵稅共金十二錢、紙數八十四ページ、總目錄付き。府內無郵稅。但し本十一月に限り十月の第廿八號から十一月最後の三十三號に至るまで總六册を一部に合本して賣ります是は續稿になッた記事が彼是ある爲めです是は定價十五錢五厘郵稅共十七錢五厘です。

注意

本號には押繪**梅**に式紙のカアド・梅に**鶯**のカアド
芙蓉の羽子板
美妙子の**語調論**
懸賞唱歌・新作小說・最良朱肉の製法が出て居ます

明治二十二年十二月廿一日印刷
明治二十二年十二月廿二日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野惠吉
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

いらつめ第三十六號

家政

押し繪作り方（第三）　石原かづえ子

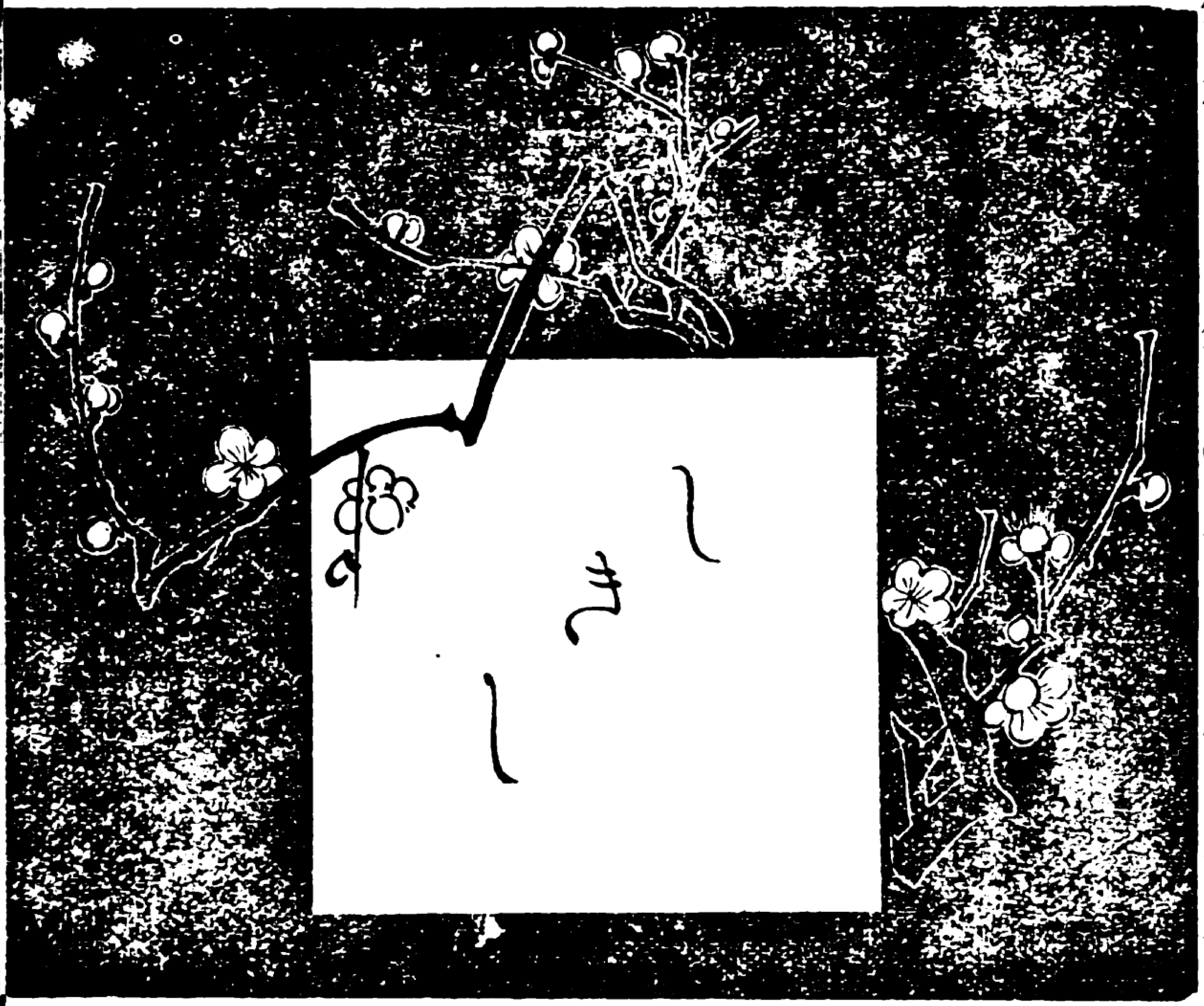
五　押し繪の葉に金粉で筋を入れる仕方

桃、朝顏などの葉は大抵金粉で筋を入れます。　金は擬ひで澤山ですが、一匁二十錢から卅錢位迄のが宜しいです。これを膠で鎔かし、指の先きでよく解いて用ゐるのです

綿の入れ方、葉又花其他の物でも綿を入れるには最初自分が張らうと思ふ切れ地を正しく下に置き、綿を上へのせ、其上へ臺紙をのせ、臺紙の通りに綿及び切れ地を切り、其儘小糊で張りつけるのです。

六　梅に式紙のカアド張り方

下の段にあるのが梅に式紙のカアドの圖案です。　梅が白ならば下の切れ地を水色か、紅か、淡青かで張るが宜しいです。　もし梅が淡紅色ならば地は白か水色がよろしいです。これ故、自分の思ふ色で最初に臺地を張り、中の式紙の處は別にきりぬき、跡で廻りを裁ち落とし、裁ち落とした丈を縁とし、臺地と式紙との區別を立てるのです。　餘の張り方は式紙とカアドと同じで宜しく、兩方とも臺地の色に合ふ色を用ゐて縁を細く別に張り、表裏の間に挾むか、又は裏を表より少し大きく裁ち、少し表の方へまして作るのが第一に簡



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

單です。　が、最も立派なのは打ち紐の細いのか又は大白で縁を飾り付け、上の方の中へ双方の紐を持ッて來て種々に結び、下の方へ結び、餘りの二つを下げ、流蘇のやうに先きをほごして下げるのです。

　木も枝も茶色の絹が宜しいです。が、枝は細い事ゆゑ寒冷紗で裏打ちして直に用ゐるのです。

　花は滿開の方へつゝいて張り、半開及び蕾は別々に張るのです。　黃心は西洋の木綿糸で、花を臺地へ張らぬ前に黃心と花の表へうまく現れるやう裏へ張り付けるのです。

七　梅に鶯のカアド。　もし又梅の枝ぶりをかへ、式紙と去り、鶯を置けばそれでもカアドは出來ます。　其時は鶯をば白絖で張るのが第一です。　其故は繪の具がよく散る故です。　胴の羽をば上下二度に張り、嘴も眼も黑の絹糸にしますが、眼は結び玉にして高くならせるが宜しいです。

八　芙蓉の羽子板。　花は淡紅色、青梅綿三枚入れ、一片宛張ります。　黃心は黃色、萼は淡綠、青梅綿二枚入れ、是も一片宛張ります。　大な葉二つは濃綠、若葉は黃勝ちの樺、又は全くの樺です。　一番大な蕾は其中の辨だけ紅梅色稍小いのは淡色、極小いのは萼と同じ淡綠です。　また臺地は白縮緬か、白絖か、白茶か、鳶色がよく合ひます。　但し綿は入れぬ方が宜しいです。

改良實用衛生料理法（其八）

元鹿鳴館料理方岩間芳松

上等料理の部 卅三號つゞき

廿五　鷄の蒸し燒き。　鷄の毛を拔き、羽を肩際から切り古い新聞紙に火をつけて殘る毛を燒き、首の背は縱に庖丁目を入れ、皮を切り、又皮を頭の際らか切り、腸の方へ回し是を背際から切り落とし、皮を殘して置き。　又尻尾と肛門の間を庖丁で少し切り、肛門の回りを丸く切りぬき（大便袋を切らぬやうに注意せぬと臭氣が出ます）、首を切ッた孔から中指を中に入れ、背の左右にあるドリをよく取り去り、又充分臟腑の回りをえぐり、又尻の穴から中指をさし入れ、臟腑を引き出し、水で洗ひ、足の附け際から串を差し、ぶりきの皿に入れ、脂肪を火で解かし、鳥に掛け、鹽胡椒をふり、ストーブに入れ、最初十分時間も置き、上へ油を度々かけ、腹が狐色になッたのを見て横にし、鹽をふり、又二三度油をかけ、左右の足を狐色に燒き、串を拔き去り、別皿にとり、油を絞り、燒き肉汁（製法第卅一號にあり）を少しに醬油を加へ、火にのせ、沸え立つたのを鳥に掛けるのです。

　鳥を切つて食饌にろなへる時には股と胴との間に庖丁を入れ、上へあげ、足の方へ曲げて引くのです。　又肩際から庖丁を入れ、肉に羽及び骨をつけたまゝ切り取つて皿に盛るのです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝美術

文と語調との關係(其二)

美妙齋主人

今こゝで云ふ文は主人が常に云ふ廣い方の意味の文、すなはち其体の如何に關せず、事と記し或は論ずるに方り、音調の束縛を受けずに進む物を言ひます。文と詩との廣い區別は曾て新小説の外編で馬琴文を略評した時に與へた方が有りましたが、則ち今標題にかゝげた文も其意味です。四六や七五のいはゆる文は主人が見た處、どうしても詩の方です。たとひ其体は言文一致にしろ、雅俗折衷にしろ、前言つた文の定義に背かぬ以上は主人は執ッて之を言ひます。

土臺の文の意味をかう定めて置いて、さて是から語調といふ言葉の意味です。完全は定義をはまだ得ません、ゆゑ、是は僅に意味と言ふだけにして置きます。

語調と言ふ言葉には不思議な癖が有ります。此類の言葉に吾々は幾度も接しますが、終にまだ其恰好の定義とば見出だし得られません。即ち調といふ言葉に積極の意味を持ッて居て、消極の意味も、中間の意味をも持たぬ事です。説き明かして見ましやう。

調と言へば普通の觀念で齊調を想ひ起して、更に不齊調を思ひ起さず、其實調には中間の、公平は意味の有る事と知りながら、猶われ〳〵に一派の妄想も有ります。齊調と言ふのは積極の意味、不齊調と言ふのは消極の意味、そしてただ調と言ふのは中間即ち原子の語です。言語學の語を假りて解きかへれば、齊も不齊も各子韻の中の一つ、そして調は其母音です。道理は全く是と分かッて居て、それで猶突然に調と考へ、語調と聞けばむしろ吾々はこの積極の意味を心でむかへるでは有りませんか? 此迷ひ、これがこの言葉に通じ易い解義を與へる大きな邪魔になります。

それ故に主人は語調を説き明かす前に其語調に――變則ながら暫時――齊調と不齊調との二つが有るといふ事を解くつもりです。さて其齊調です。齊調とは耳に愉快を與へる言葉の音で、不齊調とは耳に不愉快を與へる音、これで大抵言ひ盡くして居ましやう。で、之を總稱して語調と言ふのです。

さて文に於ける語調です。古代、文と詩との區域の明らかで無かった時代には其最も感覺にしたしい關係を持つ詩の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

方がむしろ間文よりも勢力を持ッて居て、したがッて語調と言ふものも詞藻に大關係を持つとは最も早く承認されてありました。で、其論の及ぶ處は終に文にも語調の有無を以て主眼の有無をさへ判定する程になりました。それを何故と言ふに今日の東洋人のみならず、西洋人も亦この風習には頗る深く染まッて居るからです。泰西の修辭學を修めた人は文と語調との關係をも見た事でしやう。ろれが中々に苛酷です。今一々是は西洋、是は東洋と區別はしませんが、併し是等語調崇拜家の説を擧げて見ましやう。

語調崇拜家は文は讀で趣きを生ずるものと信じて居ます。實にこの信じが語調崇拜を起した原で、其いはゆる「讀む」と言ふ言葉の意味は既に全く文と詩とを混亂して居る證據を具へて居ます。

重ねて言ひますが、文と詩との相違は音律の束縛の有無です。果たして、是等語調崇拜家のいはゆる「讀む」は「吟ずる」と全く違ッたものでしやうか? 主人はまだ之を認めません。これらの「讀む」は吟ずると同性質です。なせといふに、是等の「讀む」は語勢に緩急波瀾を立てます。も、語勢の緩急波瀾では無くて語調の緩急波瀾です。「吟ずる」と何處に相違が有りましやう。有るのは意味の深淺たけです。

既に「讀む」の意味は是です。讀んで趣きを生ずると是等が言ふのも亦無理は無い事です。が、それがため是等崇拜者の眼には猶文と詩との區別の無い事は知れます。思ふに言文が一致せぬ間には自然この讀むと吟ずるとが同じ意味になる事です。が、言文がまだ一致せぬにしろ、文をば吟せずに、まことに讀むのが至當なのは言ふまでも無い事でしやう。讀むと言ッても決して前用ゐた意では有りません。語勢の緩急波瀾で口に上らせるのです。語調で上らせるので無く。既に是ならば語調の齊不齊を文に論ずるのは或は蛇足では有りませんか?

五社百詠 (其二、卅五號つゞき)

俊成卿

○柳

手弱女のよとての姿おもはえて眉よりあをきたま柳かな。

玉やなぎ匂ふともなき枝なれど綠の色のなつかしきかな。

淺みどりさほの川邊の玉柳、つりとたれけん糸かとぞ見る。

淺綠おのが宮とや思ふらむ、柳の枝にうぐひすの鳴く。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

露ぬけるはるの柳はさは姫の玉のすがたを見するなりけり。
右玉やなぎ匂ふともの歌は玉葉集にもあります。

○早わらび

たがために忍びのをかの下蕨、けふりは立てず燃え亘る覽。
頼みこししめぢが池の下わらび、下に燃えても年へにし哉。
いにしへを思ひ社やれ、山深み、ふたり行きける春の早蕨。
連氷ゐしたるみの森の早蕨のをりにだにはや人のこざらむ。
炭竈の烟になるゝ小野山は春のわらびもまづやもゆらむ。

○櫻

猶も思へ、櫻の宮にいのりみむ、花を散らさぬ神風もがな。
忘られぬその神山の花盛り、よもすがら見し春の夜の月。
是ぞこの奈良の朝の花ざかり、こり重りてにほふしら雲。
吉野山はるの雪とは見えながら風こそ薫れ、花にやわる覽。
山櫻ちるに光りをやはらげて此世に咲ける花にやわるらむ。
右終りの山ざくらの歌は風雅集にも出て居ます。

第八回懸賞文藝得點の分

題　歳暮（唱歌淨るり及び文章に限る）

取捨標準　第一　意匠の新奇○第二　調及び修辭○此二件を備へた物を一等とする事。

○唱歌

待ちにし月はとく過ぎて　殘れる日かずもわづかなり。
花にあそびし春のあさ、　月にうかれしあきのゆふ、
思ひいでゝはいたづらに　くやめど甲斐なき年のくれ。

右…小島　雪子（トウケイ）

右評　如何にも滑な出來ですが、格別の意匠の無いのが瑕です。

花に遊びしはるの日も、　月にうたひし秋の夜も、
昨日かけふと思ひしを、　このとしも
いたましや、
半ばゆめぢと過ぎさりて　その月花はいまいづこ。

右…落葉　女史（カワツケ）

右評　前の小島女史のと甲乙の無い作です。

梓ゆみ春たちしより　ことしはとちかひし事は、
今年はと思ひしことは　墓なくもゆめとなりけり。
くやしくも空となりけり　百千度くいてかへらず。

右…石川　信子（ミカハ）

以上いらつめ一部進呈

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(一)
天變しきりに、地異しげし。
かく恐ろしき世の中も
あながち年のつみならず。
憲法うまれ、太子立つ。
この有りがたき喜びは。
即ち年のいさはしぞ。
送れや、おくれ、諸ともに
いはふてれくれ、この年を。

(二)
林にたかき木のならひ、
ふく仇風にそられしも
あながち年のつみならず。
世の有りさまのいちじるく
歩みとすゝめし嬉しさは
即の歳のたまものぞ。
送れや、おくれ、もろ共に
祝ふておくれ、このとゝを。

右…蘆野潤三郎(イヘシロ)

右評 斬新な意匠、壯快な作。しかし調べは下です。

花に馴れ、月をめでしも
ゆめのごと、まださめやらぬ
今は早ひとよふたよの
名殘りのみ年はのこしつ。
つきし鞠、玩びし羽
移り香はまだ失せやらず。
弓のこし、矢にかふ手づゑ
稚名ぞかたみなりける。

右評 「さめやらぬ」が緩い言葉でそ。

右…撫箏女史(ハ)

昨日とくらし、けふと過ぎ、
流れつゝ馳する月日とし
堰きとめかねて空しくも
又の歳暮に今ぞあふ。
緑のかみとくれなゐの
顏ととしゆめにみつ、
覺むればいつか落葉して
かしら霜おき、顏に浪。

右評 「落葉して」が遊んで居る言葉です。

右…撫箏女史(ハ)

以上第三等賞いらつめ三部進呈

はする月日に關もなく、
明治も二十二となりぬ。
年のくれぞとひなみやこ
うごかぬ御代のそなへ餅、
つきぬく杵の音たかく。
ちまた行きかふ人々は
又くるはるをむかへんと
旭日かたどるだい／＼に
かざりのくさ／＼買ひあつめ、
數の子だからすゑならべ、
福、祿、壽命、のびよとて
むつみていはふ盛り蕎麥に
祝ぎをさむる日となりぬ。

右…矢澤潤三(トイケイ)

右評 中々自在ですが「かざりの云々」の一句が堅くない句です。

花のこかげに假りねの夢も
さむるは今日か、はた飛鳥川
流るゝまゝに額によする
浪に心のくだかるゝかな。

右評 傑作ですが、花のこかげと出したのが大して深い關係を持たぬのが難です。

右…落葉女史(ワカワケ)

矢よりも早き駒の足、
流れてたえぬ川の水、
まつとても
歸らん日とてアラいそに
寄するは早き顏のなみ、
としのなみ。

右…落葉女史(ワカワケ)

右評 前と同じ意味で、中々の上品ですが、一首中に早きといふ語がわるく二つ重なりました。

いつしか年もスギの戸に
落葉ふきまき、わがゆめを
さましてよとや小夜あらし
いたましや、きのふまで
花にかりねのてふ〳〵を
驚かさじと吹きたるに。

右…落葉女史

右評　優美な作ですが、既に世にある成句を初めに用ゐたのと歳末の心の乏しいのとが瑕です。

以上準二等賞いらつめ六部進呈

月日ながれてゆく水の
ことしもくれぬ夜半のかね。
こんてふとしと去るとしの
さかひさやかに聞ゆなり。

右…菊のや露子(オホナカ)

右評　調も高い、すなほな作ですが、惜しい事には趣向が些し古い方です。

(一)

流るゝとしなみ早晩寄せ來て
今年もくれとはやなりぬれば
◎都もひなもおしなべて
春まちわびしく見ゆれども、
猶ひとしほに
見ゆるは園生の梢のつぼみ、
をとめごたち。

(二)

柱にかけてし暦の殘りの
いと短きを見てしるごとく
まもなく春となるなれば、
かぐばしかをりと美しき
花ひらかせん
時ともなれり勉めよ、乙女。
忍べよつぼみ。

右…桂蘇小史(トウケイ)

右評　珍らしく新らしい意匠、しかも調べも殆んど上乘です。が、(一)に「見ゆる」が二つあるのが何よりも瑕です。

千歳ふるてふ高さごの
尾のへの松のわかみどり、
老いさき長きものからに
くれ行くとしを惜むてふ
すがたも更にしら雪の
つもると聞けば中々に
學びのまどのとしなみは
わきてもはやき心地せり。

右…小向きみ子(ヒタカ)

右評　しらべと云ひ、趣向といひ、頗る目覺ましいですが、「ものから」が瑕となりました。「ものから」は「ものながら」で、反語です。「から」とは全く違ひます。

以上準一等賞いらつめ二十部進呈

〇追加

かぎり知られぬ齡めて
世にスミの江のあしたづも
こゝろは同じ世の人と
共にやとしむくれ行く年。

右…小向きみ子

右評　芦田鶴も年をゝしむかと言ッただけ、其外の趣きは有りません。故、これはいらつめ一部を進呈する價値の作です。

雑纂

米澤の鷹山侯女中への示し書つゞき 卅五號

況んや女子の生育はいつまでもしとやかに物やはらかなるこそいとよしき物なれば、これら皆成長の後にこそと思ふものなれど、一尺の草も一丈の木も土を穿ち出づる其はじめより養ハずして、一丈一尺の後花實を得べき。其時にのぞんで俄に手を入れ、枝など矯むれば木勢いたみて其天照をうしなひ、快よく花質を結ばざる物ぞかし。人も細少の用捨を置き、この年頃に至りてやれそれと世話し敎ゆるとも、其はじめわろき癖つきては屆かぬものぞかし。敎育は其はじめに於ててん〳〵とゝのめと云ふこそ百年の後までの基なれ。されば易といへる書にも蒙以養正とあり。蒙とは物をかぶりたるをいふ。物をかぶりては目も見えず、耳もきこえざるなり。それよりして童の何の辨別も無きをたとへて蒙とは言ふなり。其何の辨別なき内より邪ならず、正しき道を導けば、骨折らずして成長の後も正しき人となるといふ事になん。其辨別もなきを諭し導くは詞もて敎ふべきに非ず。その取り扱もつて感通するなり。それ物の感通ほど妙なるものは無きなり。猫を好く人の側には知らぬ人とても自然に寄り添ふ、嫌ふ人の側へは寄りつかぬ物にて、捕はるゝ心なき人の傍には鳥おどろかず。〇心ある人にハ間遠く隔たれど忽ち飛び去るなり。これ人と鳥獸との上だに感通の理は免れず。況んや人と人との上をや、耳目の及ばざる處に感通の理あるぞかし。今度阿増どの、手許にて養育の事なれば今日の上の取り扱ひこそ大事なれ。いまだ一向の幼稚なるに、何の事々しき無用の辨に似たれども、敎育といふハ生まれ出づるより始めて一日も欠けては叶はぬ事にて、段々と成長にしたがひて、其時々の敎へ方、育て方有る事ぞかし。まづ〳〵今日の上は朝夕の取り扱ひ方如何にもやかましくなく事しづかに、物やはらかにして、其つきそひ扱ふ人ハ互によく和合し、馴れ合ひ、お増どのゝ側へよる時はまづ我心を和かにして自己の上をつゝしむこそ始めにいへるそよ吹く東風、しとふる春雨なれ。知らず〳〵の内にいつしか感通の理ありて先へと入るぞかし。まして乳などまゐらする折りには必らず心中を平にし、いさよぎ心もて參らすべき事なり。只何事も春日の悠々たる心持ちこそあらまほしけれ只今の上の敎育にて迂遠なる事にたれども、かく育て置かねば末に見事なる果實は得られぬ事にて肝要なるぞかし。

物でハじめと愼まざれば終りを全くしがたき故に理窟らしき事なれども、千年の今日をはじめとし、此心得を皆人に言ひ知らするものなりかし。　初夏初三。　（をはり）

諸色取り合せ方 卅五號つゞき

其六　金鳶と濃藍

金鳶とは鳶色のすこし黄がゝッた物で、また濃い藍と紺とは違ひます。　普通にハ紺と濃い藍とを一途にしますが、實ハよほど互に違ッてゐて、即ち藍が濃くなッてむしろ赤がゝッた金色を現すのが濃い藍で、すこし黒味がゝッたのが紺です。　金鳶と濃い藍とを合せたのは頗るしつこい色合ひです。が、如何にも見覺ましい、勇氣とふくんだ色になります。その證據にはこれら二つの色を取り合せた糸織り、南部の類を見ればわかります。　この色はきらびやかですが、可なり年を取ッた女性、及び十六七以上のいらつめにすこぶるよく似合ひます。　樣子は何となく嚴正に、きつぱりとした處の有る色合ひですから、すこし顔付きのやさし過ぎたやうな人が用ゐて、尤も品位を加へます。

女生徒の肩掛け漫評 卅五號つゞき

か。　た。

肩掛けで美しさを添へるのハ薄手の長い物に限ります。たとひ物は毛糸でも宜しいです。また荒編みでも宜しいです。が、其丈のみじかいのと、其肉の薄いのと、此二つにそむいては決して完全と得るものでありません。

丈がみじかい物と假りさだめて御覽なさい。　首のまはりから背中の中ほどまで及ぶだけ位にしか掛けられますまい。其時にハ何うしても肩の邊の肉付きを厚手に、わる肥りしたやうに見せるものです。　肩の邊をたをやかに、花車に見せやうとは世界一般人の望みで、從來の日本婦人服といひ、今日の婦人洋服といひ、いづれも其目的に出來て居ます。　それと故さらにやぶッて肩の邊をわざ〳〵無骨に見せるのが果たして當を得て居ましやうか。

つぎに厚手な物と考へて御覽なさい。　前と同樣の道理で折角の嬌質をもわざ〳〵横ぶとりのやうに見せるものです。たとひ帶の下までそれが垂れて居るにしろ、厚手であれば一般の身体つきを醜くするのは分かッた事です。　これ一つでも弊は知れましやう。

と言ッてわれ〳〵は女性諸君が病身で、蒲柳の質となり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

それで羅綺にもたへぬ程瘦せたがいゝと言ふものでは有りません。　しかしながら物には權衡といふものが有ります、今日數千年の後いつでも解剖學者がおどろいて感心するのは希臘の裸体像で、それらの裸体男子や裸体婦人の骨格また身体つきは何れも完全の美をなして居るものです。　其身丈につり合ッた肉、其顏につり合ッた手、いづれも美形の摸範であるのです。　今日本婦人の身の丈に於て今日の女生徒諸君が用ゐるやうな肩掛けは第一釣り合ひを失ッた骨頂です。　ぐりいす美術を一目見たらば當否は直にわかる事です。

日本婦人は割り合ひに足がみじかい、そのために身長もひくいのです。　また常に椅子にはよらず、坐ッて居る風習です。それ故また大抵のものゝ背が猫背に近いです。　猫背と身丈低、いづれもすこしの邪魔ものをでもなるべく嫌ッて、出來るだけは身長をも高く、また背をも伸びたやうに見せなければならぬ譯です。　さうした上で始めて完全の美に近よるのです。　御覽の事でしやう、日本の振り袖を。　あれころは此處に例として引いて尤も宜しいものです。　何處と言ひ、美術上一點の非難をも容れられぬ服とは萬人の大抵一致する處。なぜそれ程理に叶ッて居るかと言ふに、袖の長いのは身長を伸ばして高く見せ、そのしなやかなのは嫋娜な身体に見せ、其帶の高く括れて、背をみじかくしたのは肩の肉を薄く見せるなど一々道理に叶ッた作り方であるからです。今日の婦人洋服でもまた左樣です。　其コルセットを當てるとか何とかの點は言はぬ事として、肩となるべく纖く見せるためには裾をも廣げさせて上下におのづから釣り合ひを取ッてあります。

すべて、姿勢上、肩のいかッたのは女性にもつとも不適當なもので從來の和洋の服もそれ故それを避ける目的には爲ッて居ます。たとひ瘦せて骨と皮ばかりの身体にならずとも完全の形といふものは得られる物です。　いや、健康で肥え太ッて居て完美の姿が得られるものです。　即ち釣り合ひを無法にさへ爲なければそれで百事濟む事です。

それ故に上の方へ、しかも厚手な肩掛けをかけるのは何うしても不釣り合ひを來す譯です。　之を甘んじて爲る人は美想のとぼしい人です。

せめて薄手で、かつ長い肩かけならばいくらか飾りにもなる事です。　まづ掛けるならばその方にすべき事です。　天眞の美を損じて得意になる譯もありません。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

最良朱肉製法

隠元禪師が唐から傳來したといふ朱肉製法が有ります。其由緒の言ひ傳への是非は姑くおき、今こゝに述べるのが印肉の内でも中々宜しい法です。

草麻子をよく外皮内皮ともにとり、此實をよく〳〵すりつぶし、糊のやうにどろ〳〵となッた時、最上の粉朱（高いだけ宜し）と入れてねりませ、是を白鳥の生ぶ毛にひたして置くのです。是に絹を着せずとも決して板を損じません。普通の印肉は艾其他纖維のよわい物ですから板が埋まるので、白鳥の毛ならば決してそんな事は有りません。

普通の朱肉は些しでも氣候が變化すると多少その色に狂ひが出來るものですが、此印肉には決してその患へもありません。

普通語「です」、「ございます」、及び「であります」。

「ございます」は上流辭、「です」と「であります」は同じ中流辭ですが、既に進化して「であります」が「です」になつたのを構はずにやはりわざ〳〵「です」の代りに「であります」と使ふ學者が有りますが氣が知れません。

小説

年の

田中稲渥寄稿

年の垣　其一方

雪にたわむ姫垣

『堰もあへず、水ゆく川の海にいでて、年のをはりとみの嘆き、袖に降り來る雨さへも、いつしか氷押し退けて、心も跳る鯉をば、捧手もなき老の身に、額の波と諸共に、積重ねたる愁の數、かこち嘆くも愚なり……』「あゝこれお末、あれはお向の竹本で歳暮の復調の御師匠さんが汝をも弟子にしろと慫慂めた時、私が娘は私が仕上げると云ッたを根に、其後は心も顔も澁茶の待遇。其の憎さ面當にも、汝を天晴一人前の者に仕上げ、老後の樂、近所の譽、彼の草塲の蔭の我が夫……汝の父の喜ぶ顔を見やうとて、コレお末、汝が爲には此私が、手馴れぬ洗濯ものも人手を借ず、夜な〳〵霞ッだ老の針の目に、迷ッたも皆可愛子故から。人知れず麻さへ績んだ程の親心。それをも知らぬ不勉强、聞けば、毎夜〳〵

の徒遊とか、何も知らぬ親が、女の一人手に、四苦八苦を嘗て送ッた金、ヤレ洋服の、ヤレ書物の、ヤレ會堂の費用の、仲間の交際のと、其度々に餘分の仕送り。　餘り名の附く金の多ゆゑ、推量しての諫の文、其を懸隔ッて居るを宜い事に、頭から昔人ハ譯を知らぬとか、東京の樣子を見せたいとか、樣々の小言の返し手紙、何ンな手で、此親を欺く樣な手紙を書いたのだ、今度落弟をしたも道理、今迄も知らずとも……味ッたらう……嗚呼思へば……神樣、佛樣、七日〳〵の斷鹽物も畫餅で御座りました。　成田樣へ毎夜〳〵の燈明、卒業したら、私も東京へ出て、一所に八幡樣の御庭の土を踏みますとの願掛……思へば胸が……ア、神樣、コレお末、ア、佛樣サ……サ……裂けます………………」

と今迄堰き留めて居た涙の堤も一時に切れて、ワット泣伏した老母、未だ年は海道の石部邊なれど、白妙に降ッた黒髮山の雪それを年柄と云ふは愚、此話の樣子で聞くと、淨瑠璃の癪に障るも道理、當てこすりの撥と、老母の胸の埋火を、掻立て丶居ました。

それは兎も角、其娘、シカモ不孝と云ふ簪をさした娘の顏が見たいですが、相憎嚴しい意見の楔に、胸の痛むのか、今迄母の風向をトッて居た壘算を止めて、顏に手を當泣伏したので、更に分りませんが、何でも、神田の或る女學校に居た頃から貴妃物かは小町何と云ふ樣な、或る小說家の口調は、此孃の專有になッて居たとかの事で、シテ見ると此の方では、余程苛く點を取ッても、決して落第は爲なかッたに違ひなひです。　年は大概十八九。　最早難なく衣の破目を繕へる年ながら、我身の破目は繕へぬと見え、何の返し針も泣く斗りでした。

暫くは無言の所作で、老母の啜泣に相槌を打ッて、頷く眞似を爲て居るのと束髮の簪で、其も淸淨無垢の白……何で持主の心が代表出來ましたしやう……ケレド、切りと歔欷につれて、謝をする樣にも見れれば、後悔の心を取次ぐのかも知れません。　が何にも今は……其のやさしい振も老母には通じません。　思切ッて老母は涙を拭ひ「親子の緣は今日限り」と嚴い命令……「エ……エ――……ツ、私しやァー、ド……何うしやう――」

と暫くは絶絃の余韻は、慘憺たる空氣に、波を打たせて居ましたが、娘は又面を上げ、「ツ…其りや、おッかさン御情ない。　皆今迄は私が不良ゆゑ起ッたと。　御腹もたちましや

うが、是から乾度心と入れかへて、今迄の恥と雪ぎますから、ドウゾお母サン、昔の様に、申しお母サン……何んな詫でも致します……何んな仰せも背きません…申し、ド…ドーゾ、申し拜みます…コ…コレ、此様に、申し、ナゼアイと言ッて下さりません……モ…申し……れヽお母サン……

と泣き伏しながら、然も以前、盗み飲にして居た快樂の雨や、愉快の露が、一時に涙になッて降ッて來た風情です…勿論、今はダヽ、困ッたと云ふのが、此場の娘の眞顔で、其も、後悔を先に立たせた老の杖を用ゐなんだからの事で、此當惑……此周章など云ふ霧の中では、其杖と貰ッて置けば、サ迷ひも爲なんだでしやうが、矢張、後悔で先に立ちません。

此哀訴…此嘆願に對して嚴密な母ハ、一言の返答も爲ません…唯拳を握ッて歯を切り、ソシテ罪の無い下着の小紋を、睨殺して居るのみです。

此の愁嘆場へ、斯言ふ事とは知らぬ壁隣の下女お口、氣も突掛下駄の高調子で「只今御宅の孃様が御卒業で東京から歸りましたで、お末サンに御遊びに」と云ひ捨てヽ自分で返事をしながら出て行きました。

是を聞いた老母は、モハヤたまりません、何思ッたかツト立て奥の間へ入りました。 後は兩方で疊に頭を打った音斗り……………

其二方 恥かしさに掩ふ袖垣

「アラマー此毛糸の鞠は何で轉げ落るだらうアヽさう〱、私が餘り嬉しいので、イツ〱として小跳をするので、マー、恥しい…私とした事が…然し、思へば〱嬉しいこと。 アノ春夫サン、私が學校に居た頃、地理の教師で教場へ這入ッて來た時…始の内は、大層すました人と思ッたが、私が越後の地理で新潟の事を委しく知ッて居て答へると、先生イヤ春夫サンも、矢張新潟との事。 それから互に顔を能く知りあッて來ると、奇体な事には、今迄すましたと思ッた顔も、自然、威あッて何とやら云ふ様に見え、モーニングの着こなしが惡い抔云ふ朋友の批評を、知らず辨護をする内に、漸次仲間に色々と云ハれた事も有ッたが、其場でムツト見せて……陰ではニツコリ。 はては此方から言出す様に、話の緒を引いて見たりして、獨りアノ地圖ならで……色々な思ひもして見たが、只教場で御目にかゝる斗りで、別段話も爲なかッたが、調度去年の夏、春夫サンが久々で國へ御歸りの節、運よく汽車で御一所に成り、色々話も承り、又國へ歸ッて叔父の處で

折々お目にかゝり、聞けば未だ御一人との事……其時の私の嬉す……サモ自分が妻にでもなれると決ッた樣に……シカシマー、ドウ考へて見ても不思議……私が彼の方を慕しく思ば、又彼の方もどうやら私を愛して下さる樣に見え、絶えず私の胸の地球は廻轉して居る内に、彼の叔父サン……余程理學に明るい人と見え、廻轉の道理をスッパリ見拔いて、人を撰んでの相談。それも難なく丸く整ッた時の私の喜び……今考へて見ても去年の夏、アヽ目に見える樣だ……ア、何んなに嬉しかッたらう、彼の時……アラ又轉げる此鞠、貰喜にすア……マ、憎らしい。イヤ／＼、是で正月お召の靴下、何も可愛い事……ホンニマア、こんな下らない事斗り云ッて居ないで、モウ髮結も來るだらう。どれ道具でも出して」と立ち上つた娘、見れば、すらりとした丈に束髮。髮も顏も、甚く旅の勞を煩ッて居る体に、聞けば、是は此家の娘のれ芳とて、今日四時に東京から歸ッたとの事で、今迄看客を嬉しがらせて居た、其春夫と云ふと、卒業も濟んで歸ッた故直ぐ明後日、婚禮の式を行ふとの事で、家内は呉服屋が來る小間物屋が來る、料理屋が來る、かね／＼用意は爲て置ても其前となると改ッた樣に忙しい物で、第一其花嫁がヤット東京から着て、未だ癖直の髮結も來ぬ程で、取込は言ひ樣も無いです。

オヤ、噂をすれば影とやら、髮結の氣も名もお作と言ふのが一寸した油紙包を持て這入ッて來ました……「皆樣今晩は…………マア御孃さま、お早やう御歸りで御座りました。又明後日は御喜び……で厶ります。マー大層お髮の艶のよくなッてゐらッした事。そして束髮には前髮が、大層伸びましたと……ハヽア御伸しなすッたと、ホンニツー／＼、御用意の善いこと。何も御嫁樣になるには、そんなに御氣がお付きでなくッても……と職業柄とて、口に迄油をつけるにや、舌廻の宜いにはお芳も舌を捲く程で、たゞ嬉しさ耻かしさ嚙み交せて、鏡臺引直し、我と我顏に向つて、愛嬌を汲ませて居る斗り、後のお作には、鏡の我が挨拶するのみです。

此髮をズットと直して明後日の晩、日頃お母サンに聞いて居た婚禮の時の注意。何も拔らぬ樣に爲たい者だ。シテ彼の高砂の謠、それに付ても、私が精を絞ッた唱歌……蝴蝶の曲……其も唱ッて貰ひたい……ケレド朋友の無い此土地、エー、誰か一所に呼んで來れば宜かッたな。イヤ／＼私と春夫サンの盃……其を見られるも耻しい……イヤ何に名譽す、

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

ホイ是は飛んだ岐路。其が濟むと先づ旅行？………ナ………イヤ、そんな事をすると、生意氣と言はれるだらう？ 其よりイッモ滿點を取ッた家政經濟を應用して、ヨシ〳〵、何も承知、二人の生計を味く廻して、追ては三人、赤兒が出來たらそれこそ肝心……あの母のつとめを、三四度も讀廻して、彼をアーして、此をかうして、ヨシ〳〵、ウーヨシ〳〵、と思はず口迄。 知らぬ髮結は褒られたと思ひ「チー宜うムりましやう、一体、髮の毛が宜しうムいますから」。（以下次號）

寄書

女生徒のために最も深切な下宿屋を聞きたし

鷹村きやう子

妾ハ近頃地方より上京いたしたる者にていまだ東京の案内も存ぜず、勿論國に居り候ふ時より些しは東京の樣子をも友人知己より承り候ひしかども、今忽ち出京して親しく其塲に臨めばいたく預想の殊なる處もこれあり、就いて前々號のいらつめに竹村うめ子樣の御投書も同感の情に御察し申し上げ候ふばかりに候ふ。 今妾は別に保護を信じて依賴すべき親戚もこれなき事とて、忍びてある下宿に住み居り候へども、何とやら其家の風儀心に落ちぬ處あり。と申すは他の儀にもこれあらず、故さらにわれ〳〵女子の室を男子諸氏と接近して、襖一重を去れば彼我相呼應する事の得べきやうなる處に置き、其他に離れたる坐敷きの空なるもあるに、請へども貸與いたしくれず。それのみか猶恕し難きは其家の下女下男が隣室の男子諸氏と高聲に對話するを聞けば、まことに〳〵に聞くに忍びざる醜陋なる事のみにて、果ては隣室のわれ〳〵をさへ其仲間に入れ、同じく不潔なる對話を試ましめんとするに似たる處もこれあり候ふ。 かゝる醜狀は如何のものに候ふや。勿論他に妾等は存ぜねどもやはり是もいづれへか通學遊ばす女生徒と見受け申し候ふが、隨分地方訛りの言葉の方々にて是等の方も其男子諸君と同席して戲れ言を呼應して得々たる樣子も相見え候ふ。 これらを見るにつけ、一日も安からぬ心地も致され、これら奇怪なる人々と親しく禮をさへするを厭へば何となく當てこすりめきたる事のみ言はれ、それも有るか、わざ〳〵妾等の目前に於てかの男子及び其他の女子が言ふに忍びざる擧動をさへ爲し居るなど、實に言語に絕し候ふ。 あはれ然るべき下宿は他にこれなきものに候ふや。

かゝる事なれば矢張り寄宿が宜しかるべしとも存じ候へども人によれば又頻りに寄宿の弊害を樣々數へ擧ぐるもあり、前後思ひまよひ候ふ。 胸苦しさは筆紙に盡くし難く。 折角御諒讀を願ひ上げまゐらせ 右御伺ひまでに、事情細大まはらぬ筆にてしるし申し候ふ。 あら〳〵かしこ

答書

第三十三號石川信子さまの疑問への答へ

鹿皮の手袋を曹達で洗ッて硬くなッたのを柔にするにはまづその鹿皮を湯でよく洗ひ、絞り上げて直にタンニンの濃い液の中へ浸し置き、よく揉み、それから後に乾かし上げるのです…………………………………右……菊のやつゆ子

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

通信問答

心得第一　通信問答は無手數の事○第二　御問ひ合せの事が答へを載せる雜誌の八號前にあればそれには委しく答へず、只其號代を言ひます○第三　特に普遍に有益と認めた問ひには廣く答案を募ります○第四　御問ひ合せの文字能び文章は明亮に書くべき事

無教育娘さまへ　（一）ゲジに舐められると髮がはげると言ふのは古い口傳ですが嘘でしやう。現に禿が出來たらば逆ょ第十八號の毛生へ藥を御用ゐなさい（二）この頃藥を引いた鐵鍋が有ますがあれは身體に有害だとの事です　（三）何で製した珊瑚の根がけですか、通常の物なら普通で洗ッてよさゝうです。

某氏へ醬油は一度沸立てゝ置けば久しく經てもカビは湧きません。

中山登喜子さまへ　御問ひ合はせがすべて廣い題ですから其內の一つをのみ答へます。どの溫泉が一番いゝとは言へません。各々人の身體に合ふのと合へぬのとが有ります。是は體質を見て貰ッて醫者ょ御尋ねなさい。

豊田しげ子さまへ　（一）醫學を修めるょハ矢張り獨逸語を學んだ方が宜しいです　（二）東京南山伏町八番地に東京婦人矯風會があります。

昔娘さまへ　（一）シヤボンの後に硼砂を用ゐて害はありません　（二）油ぎらずょ有効の束髮のくせ直しは矢張り森屋のポマドンヌールが宜しいです。

宮井芳子さまへ　（一）仰天子の本名は武田頴、露伴主人ハ渡邊、露伴子は幸田、䩄䩄のや氏は矢崎、笠園主人は井上です。

桂𦿶小史さまへ　（一）ハンドコロンハ一瓶で無ければ賣りません　（二）硼砂と硼砂は互に進ひます。

疑問　（一）最上の水彩畫手本の名　（二）同じく鉛筆畫手本の名……吉葵春枝○（三）無限日曬表製作法…中山登喜子　（四）遠州納豆製法…無教育娘○第卅五號疑問（一）太陰曆の明治二年五月廿五日は陽曆の幾日に相當しますか　（二）陰曆を陽曆ょ直す法…北陸山峽●賞答投初四題は來一月八日、最後二題は本十二月三十日（日のべ）限り〆切●右當答の方へはいらつめ一部進呈の事

餘興

賞品はポマドンヌール一壺

（一）上がればわがるほどに下るもの何。……石川信子（ミカハ）

（二）目と四つ引いて更に易者の厄介になれば物がわかるのは何でしやう……全上

（三）十の數を細別すれば獸名二となる……瀨藤五雄（トウケイ）

（四）あつい時あつくなく厚くない時あついものは何でしやう……東しげる（シナノ）

（五）木ハ竹の親といふ事ですがなせでしやう……桂𦿶小史（トウケイ）

（六）一挺の豆腐を三庖丁で七つに切ッて御覽なさい……落葉女史（マグン）

（七）二十八を五つにわけるといやな意味の言葉になるといふ事です……柳かをる（トウケイ）

第三十二號餘興解答及び解答者姓名

（一）サカイ、カサ、カヽ、イヽ、シイ、カレ、カ、サカイ、カサ（二）でく野郞なふみよむ〔五九八一七二三四六〕ふみよむ日はこない〔一三四六一八九七五〕、再後久しくなやむ〔二五一二三四九七八六〕いやな人むつみにくし〔五八七一六三二九四〕（三）蜘（四）カキクケコ（五）かんな（六）カラス、ハト、ラッダ、ヘウ、鷹、齒膝肩、唐襦子其他いろ〳〵有ります（七）わきつします。●右當答者蘆野潤三郎○六題解答者　有本久光、設樂なは子、遠藤ふさ子、石川のぶ子、外一名姓名缺

當答者にはポマドンヌール一壺、六題解答者にはいらつめ一部いづれも進呈○解答紙は第三十七號に附錄として入れます○其號の解答紙に認めてない答へは沒書○御投寄の新謎を出せば其號一部進上。　本號新題解答御送付は來一月八日限

！社　告！

英國倫敦府發行婦人雜誌ガールスオーンペーパー齋主人の社長チヤーレッピーターース氏と當社の美妙と今度雜誌交換の約定を結びましたから取りあへず愛顧諸孃へ御知らせ申します

約定も有る事ゆゑ先方の廣告をば本號に出しました御望みの各位は發行所から直接に御求めなさい猶いらつめも此盛運を外さず一層盡力の實を盡くし參考になる事は反譯しても載せます。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

新年歳暮及びくりすます用　流行新形

名刺状袋繪紙等最上等石版印刷

本紙雜纂内に出した事を今度から成美社で御注文に應じます（雜纂欄參看）

一　圖案の工夫望みの人は畫案の趣意を詳細に認め圖案料三十錢を（郵劵代用は五厘切手一割増）送るべき事（名刺は例外）

二　既に圖案を定めて畫圖と印刷とをのみ托される人は圖案料送付に及ばぬ事

三　畫圖は成美社で清親月耕良信三氏に書かしめ決して他の畫と受けぬ事

四　圖案を付けても印刷濟の上で無くては注文者の御覽に入れるのを堅く謝絶する事

五　成美社で作らせる圖は中等密畫（疎畫でも價は同樣）の事。

		百枚	二百枚
（一）名刺	一度ずり	三十錢	四十五錢
	二度ずり	卅五錢	五十五錢
	三度ずり	四十錢	六十五錢
（二）端書板の畫紙及状袋	一度ずり	一圓五十錢	二圓七十錢
	二度ずり	一圓六十五錢	三圓
	三度ずり	一圓八十錢	三圓三十錢
（三）端書の二倍大畫紙	一度ずり	二圓五十錢	四圓五十錢
	二度ずり	三圓	五圓五十錢
	三度ずり	三圓五十錢	六圓五十錢

（一）もし書を加へる事ならば別に書料十錢及び圖案料十五錢を加へる事。

（二）もし圖案御注文ならば別に圖案料卅錢を加へ、又、書を入れなければ一組に付き五十錢引く事。

（三）もし圖案御注文ならば別に圖案料卅錢を加へ、又書を入れなければ一組に付き五十錢引く事。

○右用紙は最良洋紙で前記價の外別に紙代請求せず、これで石版は優美精巧を究めた物、廉價は言ふ迄でも有りません

●四度ずり以上、二百枚以上、及び前記紙幅以外は御注文の別に御相談の上定價を定めます
●刷る御筆蹟は雁皮に記して御送りあるべき事
●御注文の際は清親月耕良信三氏の内御望みの書工を御指名の事
●御注文を受取つて後、一度ずり物は四日間、二度ずり物は六日間、三度ずり物は一週間にこしらへ上げる事
●御注文は必ず前金の事、郵劵代用ならば五厘切手で一割増の事
●御注文品出來の上は成美社から御屆申す事
●御注文枚數は必らず百枚及び二百枚の中に限る事
●字の揮毫をも御托しになる事ならば無手數料で爲ます
●遞送料（一）は百枚以上四錢以下二錢（二）は百枚以上四錢以下二錢（三）は百枚以上六錢以下四錢

東京神田區平永町

成美社

THE GIRL'S OWN PAPER.

Part 118.—November, 1889. Containing the numbers for October. Price 6d.

Coloured Frontispiece—"THERE WAS A MILLER LOVED A MAID."

The Angel's Day. *A Poem.*
On Careful Treatment of the Voice.
Doves' Down.
Tales of Great Families.
The Last Sight of Land. *A Poem.*
Landlord and Tenant.
In Darkness and Silence.
"Shall I get well, I wonder?"
A Society for the Prevention of Cruelty to Mothers.
Inpressions of Celebrated Pianoforte Pieces.
Varieties.
What makes Beauty? *A Poem.*
The Summer Meeting at Oxford.
Reading the Bible.

Home-Made Sweetmeats.
Literary Studies.
Thanks for Christmas Cards.
My Love is Near.
Great Silences. *A Poem.*
Schoolgirl Troubles, and How to Cope with them.
Our Wild Creatures.
Prize Competition in Story Writing.
A Week in Paris for Sixth Pounds.
Dress.
"There was a Miller Loved a Maid" *A Poem.*
He Princess Louise Home.
Answers to Correspondents.

Short Story:—
In the Presence of Royalty.

Complete Story in Five Chapters:—
The Honeymoon at Hawthorn House.

New Serial Stories:—
Kathleenes "Handful." Work, Wait, Win.

PUBLISHED AT 56 PATERNOSTER ROW, LONDON.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY